

ティーチング・ポートフォリオ

日本国際学園大学 経営情報学部 ビジネスデザイン学科

卯城 祐司 (USHIRO Yuji)



日本国際学園大学
JAPAN INTERNATIONAL UNIVERSITY

目次

教育の責任	1
1. 何を担当しているのか.....	1
2. 担当科目	1
教育の理念	2
1. 自分だけの英語の学び方に出会える授業	2
2. 英語のリズムの起点となる授業.....	2
3. 英語を使って何が出来るか体感できる授業	2
教育の方法	3
1. 4技能5領域の総合的・統合的な授業.....	3
2. インフォメーション・トランスファーを意識した授業.....	4
3. 目的や場面、状況や相手の意図を理解する授業.....	4
教育の成果 および 今後の目標.....	5
参考資料	5

教育の責任

1. 何を担当しているのか

総合教養科目群において外国語科目を担当している。本学では、日本人学生は英語を中心とする外国語を学び、留学生は日本語を学ぶが、その前者である英語を担当している。国際教養モデルは10単位、それ以外のモデルは8単位を卒業までに修得する。EAP Basic 1 および EAP Basic 2 は、それぞれ週に105分の講義が2回あり、4単位である。

また、人文科学専攻（国際教養モデル、英語コミュニケーションモデル等）の主に2年生以上の学生を対象とする専門基礎科目群において、Basic Skills for TOEIC A, Basic Skills for TOEIC Bを、3年生以上の学生を対象に Intermediate Skills for TOEIC, Advanced Skills for TOEIC を担当している。

2. 担当科目

現在（2024年度現在）の担当科目とその概略は以下のとおりである。

科目名	対象 学年	受講 人数※	授業 形態	必修 選択	科目区分 (カリキュラムにおける位置づけ)
EAP Basic 1	1	15	講・演	必修	総合教養 (1年次から履修できる外国語科目)
EAP Basic 2	1	15	講・演	必修	総合教養 (1年次から履修できる外国語科目)
Basic Skills for TOEIC A	2-4	35	講・演	選択	専門基礎科目 (2年次から履修できる専門基礎科目)
Basic Skills for TOEIC B	2-4	30	講・演	選択	専門基礎科目 (2年次から履修できる専門基礎科目)
Intermediate Skills for TOEIC	3-4	5	講・演	選択	専門基礎科目 (3年次から履修できる専門基礎科目)
Advanced Skills for TOEIC	3-4	5	講・演	選択	専門基礎科目 (3年次から履修できる専門基礎科目)

※受講人数は過去の実績による平均受講人数

教育の理念

1. 自分だけの英語の学び方に出会える授業

大学生の学びは、高等学校までの「勉強」とは異なる。1人1人が自主的に、自分がこれからもずっと続けていきたい英語の学び方に出会うことが重要である。

小学校から高校まで英語を長年勉強しているにも関わらず、英語を使えるようになっていない、さらには英語に苦手意識を持っている学生も多い。その一因は、これまでの英語の授業が、例えるなら紙の鍵盤で延々とピアノの練習をしていたように、英語の知識は学んでも、実際に英語にふれる機会が少なかったからではないだろうか。単語や文法、表現などの知識が増えても使えるようにはならず、授業の中でことばを体感する、使ってみることが不可欠である。

また1人1人の興味・関心が異なるように、英語への向き合い方もそれぞれである。海外のサッカーや野球が好きな学生は、その情報をテレビやウェブで得ることが英語を使う目的になるかもしれない。あるいは英語の歌が好きな学生、洋画が大好きな学生は、その英語の使い方が英語学習へのきっかけになり、その英語とのつきあい方が生涯にわたって続くことになるだろう。授業の中で、様々な英語との向き合い方を体験することにより、1人1人の英語の学び方との出会いの場を提供したい。

2. 英語のリズムの起点となる授業

生涯にわたって英語を学び続けるためには、毎日の生活のリズムの中に英語を取り入れることが必要である。毎朝起きたらコーヒーを飲む、あるいは新聞に目を通すように、ルーティーンとして英語が日々の生活の中にしっかり組み込まれていることが鍵である。そのためにも、授業が英語のリズムの起点となるように、様々な形で英語にふれ、授業外でもさらにその英語の続きを読んだり聞いたりしたいと思えるようなリズムの起点を作りたい。また、授業の度に、教室外での英語の学びについて、Google Classroomでのフィードバックなどを通じて把握し、励ましていきたい。

3. 英語を使って何が出来るか体感できる授業

これからは「何を学ぶか・教えるか」ではなく、「英語を使って何ができるようになるか」、そのために「どのように学ぶか」が問われる。学期あるいは学年の終わり、さらには卒業時の姿を具体的に定めることによって、ゴールを可視化し学生と共有する。また、4技能5領域にわたるパフォーマンスの伸びを実感するための評価方法を取り入れたい。全ての授業を、そのゴールから逆算するバックワード・デザイン (backward design) によって設計し、1人1人の英語の良さを探り、照らし出すような授業・評価を目指す。国際性と確かな語学力を身につけ、その「何ができるようになるか」を学生と授業の活動の中で体感していきたい。

教育の方法

1. 4 技能 5 領域の総合的・統合的な授業

外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた総合的・統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり、伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指している。具体的には、次の5本立てで「英語「楽」習」を実践している。

(1) English through Dram：動画により、生きた英語を学ぶ。

アメリカの典型的な家族の日常を描いたドラマを通して、生きた英語を学ぶ。教室にいながら、海外留学の疑似体験となる。いつの間にか、帰国子女なみの英語の感覚が身についていることを体感することを目指す。

(2) Intensive Reading: 読解・テスト・テーキング・ストラテジーの体感

紙と電子版のハイブリッド精読教材で英文読解ストラテジーを、また TOEIC 対策教材でテスト・テーキング・ストラテジーを体感する。いま持っている英語力を最大限に生かして、能動的に読むことを目指す。

(3) Be Steve Jobs & Retelling：スティーブ・ジョブズの伝説のスピーチを映像やスクリプトと共に学び、ジョブズになりきってスピーチをし、再話活動などを通して、1年間で基礎的な英語を学び直す。そして、ディクテーション、口の中でつぶやくようなマンブリング、オーバーラッピング、速音読、シャドーイング等を経て、心に残った言葉や内容を自分が感じた気持ちと共に、「自分のことば」で相手にわかりやすく英語で伝えることが出来るようになることを目指す。

(4) Popular English Songs：洋楽の歌詞で英語を学ぶ。

誰もが耳にしたことがある英語の歌を題材に、曲を動画と共に学ぶ。歌詞を理解した上で、繰り返し英語の音を聞き、同化や脱落といった音声現象に慣れ、語彙や文法、表現もメロディーに乗せて頭の中に入れる。

(5) Extensive Reading: 各自が選ぶ多読教材を自分のペースで読み進める。

音声付きの英語多読教材を、1人1人選んで、自分のペースで読み進める。英語の難しさが段階別に分かれ、それぞれ30冊以上あるストーリーの中から、自分の英語力や興味・関心に応じた読み物を選ぶ。高校の教科書の1レッスンが600～1,000語とすると、毎日、それくらいの英文を読むと、1年間で高校3年間分（3年間の10倍）の勉強が可能となる。

定期試験は実施せず、授業内での様々なパフォーマンス活動を通して評価する。それらは、Extensive Readingで読んだ内容や感想を英語で発表したり、スティーブ・ジョブズのスピーチで最も印象に残った場面を英語で伝えたり、授業内でふれた洋楽の中で最も好きな曲について英語で発表したり、海外ドラマで学んだ表現を取り入れたスキットをペアで演じることなどが含まれている。また、TOEIC® Listening & Reading TestやTOEIC Bridge® Listening & Reading Testsを通して、英語力の伸びを測定する。

2. インフォメーション・トランスファーを意識した授業

「英語が読めた・聞けた」とは、どのようなことだろうか。「理解した」と同じだろうか。「頭の中に残っている」とは違うようだ。もちろん、「頭の中に整理されている」とも異なるだろう。そして、この中で、「心の中に情景を思い浮かべている（状況モデルを描いている）」のは、どれだろうか。

授業を進めるにあたっては、英語を理解することが、1語でも多く頭の中に入れることではなく、情報を整理し、その意図を理解することであると考え。そして、情報を整理したり表現したりする際に、形を変えることにより理解を深めるインフォメーション・トランスファー (information transfer) の概念を授業の柱に据える。

3. 目的や場面、状況や相手の意図を理解する授業

英語を用いたコミュニケーションでは、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことなど全ての言語活動で、コミュニケーションを行う「目的や場面、状況」などに応じて、情報や考えなどの概要や要点、話し手や書き手の意図を的確に理解したり、適切に表現したり伝え合ったりすることが目標である。そのためにも授業では、「場面で導入、活動で理解」を目指したい。

「場面で導入」する英語の指導では、英語を用いた実際のやりとりを最初に提示する。外国語として英語を学ぶ日本では、学んだ英語を教室外で用いる機会は少ない。となると、可能な限り自然に英語が用いられているような場면을授業の中で作り出していかなければならない。そのきっかけとなるのが4技能の総合的な指導、統合的な活用である。複数の技能が用いられることで、日常に近いようなコミュニケーション場面が生まれる。その中で、ある表現や形式を用いる社会言語的な意味も、あるいは付随するジェスチャーなどのノンバーバル・コミュニケーションなども学んでいくことになる。

英語の学習においては、表現や形式をいつ、どのような場面でどう使うのが最も大事である。これを理解するためには、具体的で典型的な場面を用意することが必要である。そのことによって初めて、どのような時にその表現・形式を用い、どのような時に用いないのかが理解できる。この場面の違いが鮮やかであればあるほど、覚えた表現を過剰に一般化したり、自信がないため用いるのに躊躇したりということがなくなる。

また「場面で導入」された表現や形式は「活動で理解」したい。多くの場面で活動する中で、導入で示された場面だけにこだわらず、その表現や形式が一般的にどういう場面で使われるのかについても学んでいくことが出来る。「活動で理解」することが重要なのは、その生きた場面の中での活動でたくさん間違いを犯すことができることでもある。「間違っはいけない」という意識を捨てることで、英語の上達には不可欠であり、そのためにも、「間違いを犯すことは、その表現や形式を積極的に使おうとしている」表れであると肯定的にとらえたい。

教育の成果 および 今後の目標

詳細は「授業改善報告書」を参照。

- Google Classroom で毎時間、学生に Attendance Form を提出してもらい、その中で、それぞれの授業や各活動の評価と自由記述式のコメントを求め、授業改善につなげている。
- Google Classroom には授業で使用する全ての資料を Class Material として掲載し、授業前の反転学習 (flipped learning) に、そして授業後の復習につなげ、内容の定着に役立てている。
- Google Classroom における学生からの反応は、授業のリ・デザイン (re-designing) につながっている。授業はまず計画通りにはいかない。Google Classroom 内の Class Material を充実させることにより、常に授業の各段階で3つくらいの計画を用意しておき、ある程度進んだ段階で進捗状況などを見ながら、授業計画を修正するなど、「複線型の授業」を行っている。
- 加えて、教材研究において、学生がどう考えるか、どう間違えるかを様々に想定して準備し、このシミュレーションを、授業での臨機応変な対応につなげたい。今後も、学生の表情の細かな変化も読み取りタスクを入れ替えるなど、充実した授業づくりを目指したい。
- English through Drama や Extensive Reading などのスクリプトや映像は全てウェブにあり、授業内外でいつでも学ぶことが出来、教室内外で切れ目のない学習を支えている。
- 学期に数度行うパフォーマンス評価では、仲間の前で、自分のことばで語ることにつながり、積極的に英語を使うことが出来るようになってきている。また、ピア評価では、仲間の発表をきちんと聞く姿勢づくりに役立ち、さらに “Two Stars and a Wish” の評価を心がけ、改善点よりも良い面を見つけ出すような取り組みが、協調的なクラスづくりに役立っている。
- 様々な場面で教師からのフィードバックを心がけ、学生の学ぶ意欲づくりにつなげている。

参考資料

- 卯城祐司編著. (2009). 『英語リーディングの科学：「読めたつもり」の謎を解く』. 東京：研究社.
- 卯城祐司編著. (2011). 『英語で英語を読む授業』. 東京：研究社.
- 卯城祐司編著. (2012). 『英語リーディングテストの考え方と作り方』. 東京：研究社.
- 卯城祐司編著. (2014). 『英語で教える英文法：場面で導入，活動で理解』. 東京：研究社.
- 卯城祐司編著. (2018). 『初等外国語教育』. 京都：ミネルヴァ書房.
- 卯城祐司・檜葉みつ子編著. (2021). 『中等英語科教育』. 東京：共同出版.

ほか